

# 龍王山城跡調査概要

1981

天理市教育委員会

## 序 文

天理市は、昭和55年度に、天理市龍王山城跡整備計画（天理ダム風致公園、龍王山城跡、龍王山古墳群および崇神・景行天皇陵並びに山の辺の道を結ぶ整備計画）の策定を企画した。

これに並行して、天理市教育委員会では、中世山城跡の歴史的な調査を計画し、奈良女子大学文学部助教授村田修三氏に依頼し、調査の概要をここにまとめた。

この調査は、短期間であったため、十分な調査はできなかったが、今後いろいろの分野における研究のいとぐちとなれば幸と存じます。

昭和56年3月

天理市教育委員会

教育長 中野康治

## はじめに

本文は組織的な調査にもとづいたものではなく、個人的な見解が多いことをご了解頂きたい。

折込みの龍王山城跡周辺図（縮張図）は以前に作成した龍王山城跡図を、今回新たに踏査した成果を加えて書き改めたものであるが、もとより踏査図としての限界があるので、今後実測によって細部の正確を期さなければならぬ。とりあえずこの図にもとづいて第3章を記述したので、双方を対比して頂きたい。第2章については、参照した史料を末尾に年代順に収めた。今回は龍王山城に直接かかわる史料をあげるにとどめた。

村田修三

## 目 次

1. 城 の 概 略.....	1
2. 歴 史 的 背 景.....	1
3. 城 の 鋼 張.....	4
ア. 南        城.....	4
イ. 北        城.....	5
4. 保 存・整 備 に つ い て.....	8
5. 参 考 史 料.....	9

## 図 版

## 1. 城 の 概 略

大和高原（東山内）と奈良盆地（国中）を境する山なみの中にひときわ高くそびえる龍王山の山上に龍王山城がある。この山は柳本及び田・藤井の龍王社がまつられているので龍王山とよばれ、中世の史料にも「龍王城」の名で登場する。

城は南・北二つの峰に別れていて、北の方が60mほど低いが山上が広いので、北城の方が大規模である。北城だけをとりあげると、信貴山城より小さいが、南北両城を合わせると、大和隨一の中世城郭である。二か所に別れながら、互いに呼応しあって一つの城を形づくっているのを、別城一郭の構えという。龍王山城は、規模が大きく、繩張りがよくでき正在て、遺構の保存度もよい上に、南北の別城一郭の構えであることが明確であるという点でも注目される。

しばしば龍王山城が、越後の春日山城、安芸の郡山城とならんで、日本の三大山城だといわれるが、規模だけで比べると、これは少し誇大ない方である。日本の中世山城には龍王山城より大規模なものが、たくさんある。近江国六角氏の観音寺城、越後国上杉氏の春日山城、出雲国尼子氏の富田（月山）城、能登国畠山氏の七尾城、安芸国毛利氏の郡山城、近江国浅井氏の小谷城、武藏国後北条氏の滝山城と八王子城、上野国の金山・笑輪・松井田三大城などは龍王山城より大きい。

しかし龍王山城は越前朝倉氏の一乗谷城の山城の部分よりは大きいし、本丸を中心としてよくまとまった諸郭は十分な広さをもち、防御性を考慮した施設が豊かで、堂堂とした風格を備えている。城主の十市氏は、全盛期の遠忠の時代に、大和では筒井・越智の両雄と競りあつた有力な国人であるが、全国的に見れば、あまり目立たない存在である。その十市氏が、諸大名の居城に見劣りしない大規模な山城を築いたことは注目に値する。十市遠忠と同時期に大和の国人の代表格として活躍した筒井順昭は、やはり山城を築いたが、この筒井山城は五ヶ谷と菩提山正暦寺の椿尾城（現奈良市）に該当すると思われるが、これは龍王山城より、はるかに小規模である。南和の越智氏の築いた高取城も、かなりの規模であったらしいが、近世に大改築されて変容したので、中世城郭跡としては、龍王山城が大和を代表するものである。

## 2. 歴 史 的 背 景

十市氏は龍王山の西南7キロ余の十市郡十市（現権原市十市町）を本貫とする国人で、貞和3年（1347）当時十市郡諸庄を押領したことが史料的に確められる。興福寺の大和支配の体制の中では、国民の身分に属し、春日若宮祭勤仕の国民の組織（六党）では長谷川党の領袖であった。室町・戦国時代を通じて、筒井・越智・猪尾・古市氏と並ぶ五大豪族の一であった。

永享元年（1429）から10年間続いた争乱（大和永享の乱）では、筒井氏と組み、越智・猪尾氏と戦った。応仁元年（1467）以後の応仁・文明の乱でも筒井氏と共に行動した。遠済の代のことでの十市郡（現権原市）から山辺郡の布留郷のあたり（現天理市）まで勢力を及ぼし、十市郷と呼ばれ

る支配圏を形成した。東山内の小山戸（現山辺郡都祁村）から小夫（現桜井市）にかけての地域も十市氏の勢力圏に属した。

応仁・文明の乱の後半は、越智・古市方に圧倒されて十市郷の支配を越智氏に奪われることが多かったが、小夫、小山戸に後退して十市郷の失地回復を試みた。大和盆地の十市郷、大和高原の小夫・小山戸地方、この両地区を結びつけるルートの中で、最も重要な道が釜口（長岳寺）から藤井へ越える道である。龍王山の南城はこのルートをおさえる要衝にあたるので、このルートを往復していた遠清の時代に龍王山南城の前身にあたる砦が存在していた可能性がある。

遠清の子、遠治の代、明応6年（1497）に、十市氏は筒井氏とともに勢いを盛りかえして十市郷を回復した。これには応仁の乱前から大和の国人に圧倒的な影響を与えていた畠山氏の内紛が、筒井・十市側に有利な方向に転換したことがあざかって力があったが、大和にもいよいよ国衆（戦国期の国人を國衆とよぶ）の領国形成へ向かっての自立化の動きがはじまることと、軌を一にした動きの現れである。明応8年（1499）には古市氏を除く大和国衆の主だった面々が和睦した。それもつかの間で、古市澄胤の先導で乱入した細川の部将の赤沢朝経の軍がしばらく大和を制圧し、国衆の連合も、いったん破れたが、河内の畠山氏の両派が和睦したこと、逆に細川政元政権の内部に動揺が生じて、赤沢軍が大和から引揚げたことが幸いして、永正元年（1504）大和の国衆が再び連合した。国衆達は、細川政元が河内の畠山討伐に従軍せよと命じたのを拒絶したので、永正3年再び赤沢氏の率いる細川軍が大和に乱入した。永正4年11月、反撃に転じた国衆の面々は一国一揆を催して大和盆地周辺の山山に砦を築いて、いっせいに蜂起した。「二上山・三輪山・釜口ノ上・桃尾（龍福寺）にかがり火をたき、はら貝を吹いたり、ときの声をあげたりして気勢をあげた」と『多聞院日記』に記されている。この「釜口ノ上」が龍王山城の前身の砦が確認される最初の史料である。

この時の龍王山城が、どれほどの規模のものであったか不明である。おそらく簡単な砦であったろう。十市氏の城としては十市平城が中心で、平城に次ぐ城として十市氏が利用したのは多武峯城であった。多武峯は平安時代から、しばしば興福寺の僧兵に攻められたので、寺を城塞に仕立て、大和永享の乱には越智氏と組んで頑強に抵抗したことがあった。その後、多武峯寺内で内紛が生じ、越智派と十市派に別れた。応仁・文明の亂ころから十市派の方が優勢だったので、十市氏は十市郷奪回作戦の時に多武峯を利用することも多かったようだ。永正3年に赤沢軍に攻めたてられた時、まず十市軍が多武峯に立籠り、次いで一国一揆のよしみで箸尾氏や越智氏も籠城したのである。しかし十市氏にとって、よせん多武峯は仮の陣所にすぎないので、独自の山城を完成させる必要に迫られたと思われる。

永正5年（1508）赤沢氏が滅び、それと運命を共にした古市澄胤が死に、大和の国衆では筒井・越智・十市・箸尾の四氏が傑出することになった。永正8年、河内の畠山氏が再び分裂したあたりで、大和の国衆の連合が破壊し、再び筒井・十市と越智・古市の二大勢力の対立期に入る。永正11年（1520）筒井氏に攻められた古市氏が、大和盆地を見下ろす鉢伏峠の近くに山城を築いたことが知られる。筒井氏も遅くとも1540年代（天文年間）には山城を保持して、大和盆地の平城と大和高

原の縁辺部の山城をうまく使いわけて弱を競い合うというパターンが出来上がっていく様子が知られるので、十市氏も龍王山の砦に築築の手を入れはじめたことは想像に難くない。とくに永正17年から翌年にかけて、筒井・越智・古市三氏の間で和議が進んだ際、十市氏（遠治）だけが排除され、十市郷が越智氏に差押えられたので、十市氏にとって東山内の根拠地づくりは不可欠になった。

享禄元年（1528）再び筒井と越智・古市の対立が激化したところへ、京都から柳本賢治が乱入、柳本と組んだ古市氏が柳本の没落に伴って一層衰えたので、十市氏は越智氏に押され気味であったとはいえ、国衆の代表四氏の一員としての地位は保っていた。第三の外來勢力、木沢長政が信貴山・二上山両城を根拠にして大和に勢力を及ぼしていた1530年代、十市氏はじりじりと勢力を回復した。とくに遠治の子、遠忠が十市氏の家督を継ぐと、目ざましく発展した。天文9年（1540）遠忠は筒井順昭と和を結び、天文11年、木沢長政が河内で敗死すると、筒井氏をもじのぐ大勢力を築き上げた。龍王山城の完成は遠忠時代の天文年間と伝えられるが、このことは以上の政治史の推移からも、うなづける。天文12年から翌年にかけて、しばしば興福寺の使いが訪れた「山ノ城」は龍王山城のことと思われる。天文12年6月19日に興福寺の多聞院英俊が山ノ城へ上の途中、荘生が普請中だったので笠口に泊ったという記事があるので、このころ龍王山の城下集落の整備も行われていた可能性がある。

しかし十市氏の権盛期は短く、天文14年（1545）に遠忠が死ぬと、次の遠勝の代には筒井氏の下風に立った。永禄2年（1559）から松永久秀（弾正）が大和に進出して筒井順昭の子、順慶をはじめ、筒井傘下の国衆を駆逐した。龍王山城は永禄3年に松永方の手に落ちた。落ち目の十市氏は松永と筒井の両勢力の間を動搖した。永禄5年ころまでは筒井氏と共に松永勢に対抗していたが、やがて抗しきれずに松永方に降り、娘の御料（おなへ）を人質として多聞城に入れた。しかし同8年、松永久秀が三好三人衆と対立し、筒井順慶が三人衆と結んで勢いを盛りかえすと、十市家中に内紛が生じた。同年10月、龍王山城内で謀叛が起り、城衆の一部が退城するという騒ぎが起きた。

そこへ松永方についていた宇陀郡の秋山氏が国中へ進出し、十市郷を押さげはじめたので、永禄11年3月、遠勝はひそかに三好三人衆側と氣脈を通じた。しかし人質を取られているので、はかばかしく動くこともできず、間に、山内側から秋山氏に追いつめられ、7月27日、ほとんど抵抗することもできずに、龍王山城を明け渡して十市平城へ退いてしまった。人質の、おなへは危機に陥ったが、8月19日、多聞城を脱出して木津へ落ちた。伝承では、水の手を断たれたために落城したとか、時の城主は遠忠であったとかいわれているが、当時は遠勝の代で、記録で見る限り華麗しい籠城戦も行いせず、秋山氏の手に渡してしまったようである。大和一の名城の龍王山城にしてはみじめな落城であった。

落城直後に織田信長の派遣した大軍が松永勢を支援して大和を席巻した。龍王山城には秋山氏が布陣し、国中へ攻め下って十市郷を荒らした。十市氏は龍王山城は取られるし、十市郷は蹂りんされ、不穏な動きを示したかどで十市平城も一時接収されてしまった。大勢は松永方に服属したが、家中はまとまらず、翌12年、遠勝が死ぬと、遠勝の後室と娘、おなへを擁する松永派と、一族常陸介（遠高）を擁する筒井派とに分裂してしまった。（秋永政季氏『柳本郷土史論』龍王山城には、

まもなく松永派の十市勢が復帰したようだが、事実上松永の属城の地位に甘んじた。

元亀2年(1571)8月、辰市の合戦で筒井順慶が松永軍を破ると、大和は信長政権下で筒井、松永両勢力が拮抗することになった。松永久秀は、しばしば将軍義昭や石山本願寺、武田氏と通じて信長と対立したのがわざわいして、筒井方に対して劣勢に立つようになった。国衆のはほとんどは筒井方についたので、松永氏としては退勢をもりかえすために、十市氏の残存勢力と龍王山城の位置を重視したのであろう。天正3年(1575)7月、久秀の甥の松永金吾は龍王山城で十市おなへと祝言をあげた。この事件は龍王山城の戦略的位置の高さを示すとともに、大和の名族十市氏の混迷を象徴するものでもあった。天正5年、信長に叛旗をひるがえした松永久秀は、子久通と共に信貴山城に滅び、松永金吾は御本城外で戦死した。龍王山城は、その翌年1月に信長の命令で破却された。

### 3. 城の繩張

郭の配置を中心とした城の形を繩張といふ。龍王山城の繩張の第一の特徴は、すでに述べたように、南北二つの群に別れているということである。歴史的な背景を考えると、南城の方が先に出来、道忠の全盛期になって北城が出来たと考えるのが無難だろう。合わせて別城一郭の構えとなっており、北城が本城であり、南城が詰めの城にあたる。規模だけでなく、繩張の巧みさ、土壘や空堀の普請の技術においても、北城の方が敷等上まわっている。どちらも土造りの城だが、北城の方には所々に石垣が残っており、この点からみても北城の方が新しいことがわかる。ただ南城も北城と同じころの普請と思われる新しい施設もみられるので、北城とともに南城も修築しなおされたことがわかる。

北城と南城との間には、300m程も人工の跡のみられない山が残されており、ここは標高538mを測る。南城の最高所が585.7m、北城が522mだから、南城から順番にくだってきた尾根の出っぱり部分に北城が築かれたことになる。このように北城は何段にも見下ろされる位置にあるので、最初から北城の部分に築城することはありえない。まず南城が築かれ、その後南城部分では狭くなるほどの大軍を擁する時代になって、低くて不利だが、広い郭をとることのできる北城部分に築城の重点が移ったと考えるのが自然である。

なお、北浦家所蔵の「南北山城絵図」などによると、各郭には次のような名称が伝わる。(○内数字は折込み繩張図の郭番号) 北城 ⑥本城(丸)、⑦辰巳ノ櫓、⑧太鼓ノ丸、⑨時ノ丸、⑩五人衆ノ郭、⑪西ノ大手ノ丸、⑫茶屋ノ屋敷、南城 ④本城(丸)、⑤弥七丸。

この絵図はきわめて精巧なものであるが、そこで郭として図示された部分には今日遺構の確認できないものもあるので、折込み繩張図の図示範囲はこの絵図より狭くなっている。

#### ア. 南城

以上みたように、南城は北城より古い部分である。繩張は比較的単純である。最高所の④が近世城郭の用語をかりると本丸にあたる。①から⑥まで徒線にそって直線状に郭が連続する、連郭式山

城である。①の西に空堀（堀切）があり、それより西の⑨⑩⑪は崩平が不明瞭で郭とは断定できない。④と⑥、⑥と⑩の間にも堀切があるが、⑩の南東端も堀切で画されているので、ここまでが一つづきの城域とみなされる。①から④までは段状にのぼっていて、相互をつなぐ道は、それぞれ正面の壁面をのぼるようになっている。③と⑩の間には石の階段も残っている。連郭を直登路で結ぶやり方は古い城の繩張りに多い。①から⑩までの連郭部分が南城の第Ⅰ期の部分であるとみてよい。

この連郭部分に後の修築が加わって城郭の幅が広くなっている。①から⑩まで例外なしに、北側によりそろのように帯状の腰部が続いている。この線より下にも平行して道がつけられ、途中に⑫の広い郭があって、北東麓の藤井に対している。この道は⑬の西へ回り込んで、⑭・⑮（天狗岩）とのぼってきた道と合して、連郭尾根の南側山腹へ入込んでいる。このまま行くと⑯・⑰・⑪を経て⑤と⑩の間を回り込み、北側山腹へもどる。ぐるりと一周する環状路になっている。

この環状路には手のこんだチェックポイントが二か所設けてある。その第一は、①と⑩の間の空堀の南口に接するところで、小さな郭になっている。この小郭は南側に⑫の郭の北縁の土塁が追り、空堀とみなしてもよい形である。④への登り口がここにあるが、①・⑩間の空堀の堀底が続いて登り口を守り、土橋で渡るようになっている。現在は崩土で浅くなっている。よく見ると、こまかに普請の跡がしのばれる。もう一つのポイントは⑬の東南30mの地点で、⑤と⑩の間の堀底へ向かってカーブするところに、一辺5~6mの小さな枡形がある。かなりくずれているが、低い土塁が左右から突き出て道をさえぎり、小さな障地をジグザグに登るようになっている。

本丸に相当する④の南に、南城では最大の郭⑦がある。⑦の南下には土塁状に突き出した細い郭⑧があり、その東に空堀状の湾曲した細長い郭がある。この東端は切り落してあるので、真下に⑨が見える。環状路を通って⑩まで来た敵軍を背後から不意打ちができる。これはきわめて巧妙につくられた横矢の施設なのである。ここで被害を受けた敵軍が、なおも前進しようすると、前述した枡形でくいとめられるのである。

環状路の南、⑪と⑩の間の緩傾斜の山腹には、柳本龍王社を含む諸郭、⑫⑬⑭があり、⑭は釜口道の峠から東へ分れた道が乗っている。柳本龍王社の泉は南城で最大の水場（水の手）である。⑮はこの水の手を守る郭で、その背後に土塁が設けられ、貯水量を増すようにしてある。⑪⑭の下にも郭⑯があるが、単純な削平地である。その東南、やや張り出した地点に一辺10m足らずの小さな方形郭⑯があり、南斜面全体に、にらみをきかしている。

前述したように、南城は元来、釜口から藤井へ越える峠をおさえる番城の役目をした砦の発達したものである。だからこの峠道に向かってせり出した尾根先端部⑯にも郭があつてしかるべきだが、かんじんの場所に林道の掘削工事がなされて、確認ができない。

## イ. 北 城

北城の繩張は南城に比べて、はるかによくできている。①から本丸の⑩までの諸郭は連続しているが、直登路で結ばれていない。北側山腹へ回り込む迂回路で連絡されている。③と⑩の間はジグザグ道でつながっているが、容易に遮断できる。⑩は西南隅に虎口が開いているが、これは南下の

⑩・⑪へ連絡する口で、④に登るには北側山腹へ迂回せねばならない。②・③・④・⑤・⑥・⑦は、いずれも南西側に土壘がある。道のつけ方、土壘の残り方、いずれも南西側に対する防衛を厚くした構えである。南西側とは大和盆地に向いた方向である。

つまりこの城の防衛正面は大和盆地に向いた南西側で、北東側の大和高原は安全地帯とみなされ防御が比較的弱い。特に弱いのが⑨の郭で、北東の隅は次第下がりに谷にくだっているし、東側からかぶさる形の山には郭がない。尾根続きでも、谷のぼりでも容易に侵入できる。永禄11年7月に大和高原側から攻められて簡単に落城したのもこの弱さのためである。

北城の主要な虎口は二つある。南虎口は⑥⑦⑧にはさまれた窪地にあり、この窪地の前後に、両側から突き出した食い違い土壘がある。食い違い土壘にはさまれた木戸口は二か所とも、奥へ進もうとすれば右回りになる。虎口を右回りに入ることを頑の虎口という。弓手は左手だから、敵軍が弓を引きながら突進する際、左回りなら得手になるが、右回りなら逆手になる。敵軍が逆手の姿勢になるようにしつらえると、城兵側には有利である。まことに心憎いばかりの巧みな施設である。

この南虎口へは南城の方からも来れるが、南城の防戦にあわずに攻めようとなれば、中山口から直接登ってくることになる。この道は⑨を経て馬池にぶつかる。馬池を回りこまなければならない。ところが回り込む所、⑨の東に空堀があり、この空堀を土橋で渡らねばならない。いったん危ない橋を渡ってから南虎口に達するようにしむけてあるのである。馬池がなければこの危ない橋を渡らずにすむ。だから馬池は城の用水池であるとともに防衛施設としても機能しているのである。

ところで、中山口から登ってきた道は、今日では馬池を回り込まないでも谷道のままで林道にあがることができる。林道から南虎口へ達することができる。しかしこの林道ができるまでは、⑥から馬池の上まで尾根がせり出していて通れなかった。谷道を押し通ろうすると馬池にはばまれる。仕方なく空堀、土橋を渡る、という具合になっていたのである。だから今日林道を通してしまったことは、巧みに工夫された虎口ルートを破壊したことになる。実に惜しいことである。

中山口から登ってきた道を、馬池の方に行かずに、⑥⑦⑧の南側山腹の方へ回り込もうとするはどうなるか。ここには見事な堅堀群がある。この中にはまり込んだら左右の動きがとれず、堀底をまっすぐ登らねばならない。すると上から狙い打ちにあうし、単に石を落とされるだけでも被害を受ける。一見、でたらめに山腹を掘り込んだような空堀群だが、敵軍の機動力を制約する巧みな施設である。同種のものは、大和では植原城・貝那木城をはじめ数か所ある。全国では越前国朝倉氏の一乗谷城をはじめ、北陸地方の城に多く、その他、中国地方、九州まで分布する。空堀とか敵形阻塞とか呼ばれ、最近城郭研究家の間で注目されている。龍王山北城の空堀は、単純に平行せず、地形に合わせて向きを変えている点が面白い。ところがこの空堀の上も林道で破壊されている。おそらく横に帯郭が一本設けられていたはずだが、それが林道で失われている。

北虎口は⑨の北端にある。東は⑨直下の張り出しから見下ろされる急斜面で、西は⑨北端から伸びた土壘によって、せばめられている。董生口から登ってきた道が、この虎口に達する。虎口の外の⑩・⑪・⑫は平坦だが、やや傾斜しており、郭として拡張工事が行われた形跡もあるが、未完成である。

北虎口から⑥を経て東へ登ると、①の東端に達する。ここに北城で最も保存のよい井戸がある。井戸はこのほかに、⑩にもあるが、ほとんど埋まっている。

なお⑨の東の馬ヒヤシ場、南虎口の露地もかつては水がたまつていて水場であったと思われる。城内の道は、北虎口から井戸わきを通って③と④の間、②⑤を経て城外の谷に出る道が幹線である。この道から左右の諸郭へつなぐ道が分岐する。この幹線路から①を通じて⑪⑫へ行く道がある。⑫から一段上ると⑪を経てきた道と合する。この道を一段上ると、⑥と⑦の間の堀底道になり、南虎口とつなぐ。ここから⑥と⑦の間の堀底道を通じて⑪⑫⑬⑭に達し、⑧の南東虎口を下ると再び⑪に達する。本丸の周囲をぐるりととりまく環状路になっているのである。

完全に一周する道は③・⑩・⑪、⑥⑦間・⑥⑦間・⑪・⑫・⑬をつなぐ道だけだが、⑩・⑪・⑫・⑬・⑭をつなぐ道も外環状路となっている。山頂から山腹に向かって放射状に郭がひろがる縄張は、単純連郭式より発達した縄張だが、さらに進んだ縄張は、諸郭が横に連絡しあう輪郭式、あるいは回郭式である。敵軍の移動に応じて城兵の側も機敏に動いて防御できる利点がある。北城の縄張も環状路によって輪郭式の要素を備えている。

そのほかにも北城には注目すべき施設が數多くある。土塁と空堀を組み合わせた防護施設として目立つのは、⑩、⑪、⑫の東下、⑩、⑪と⑫の間などである。⑩と⑪の間の道は、北東の尾根との間を切断した巨大な空堀にせり出した土塁を備えている。この土塁の附近には石材が散乱しており、元は石塁であった可能性がある。また、石垣は⑩の南西土塁の根方、⑪の南西下の小郭が⑩の南口にせり出した箇所、北虎口を北に出た所、⑦の本丸との間の空堀にせり出した壁面、などに残っている。

龍王山城の城域は、北城と南城をあわせた範囲であるが、広い意味における城域は、西は萱生・中山・釜口に至る山腹、東は藤井の集落近くまでを含めて考えるべきである。伝承では中山に城下町が建設されたということだし、このあたりは十市氏最盛期の十市郷に属した。山麓の居館地と背後の山上の詰城を合わせて根小屋式の城郭と評価するケースにおいては、その全体を城域とみなすのが普通である。ただ龍王山城においては、山上と西側山麓との隔たり、比高がきわめて大きく、通常の国人級の武士がこれを一体として防護プランの中に収めることは不可能であるが、十市氏最盛期の強大な勢力をもってすれば、あながち不可能とも思えない。少くとも、山上の城郭から、萱生・中山・釜口・渋谷へ下る四本の山道は、城の道として城郭の構成要素に含めて扱うべきであり、その道の途中の各所に、まだ発見されない防護施設が存在する可能性が残されている。

東の藤井へ下る道は、南城の北端から尾根続きに行く道（藤井道）と、東端の⑥の郭の東側空堀から尾根道（笠道）を120m程東行して東北へ下る道（仮に南道とする）の二本がある。藤井道を⑩地点から380m程行くと、標高545.8mの小ピークがあり、その裏から北へ120m余の馬場跡（絵図には馬乗馬場と記す）がある。

藤井へ下る南道の方は、現在は途中で谷道となるのが本道だが、谷へ下りずに尾根を進むと、藤井集落の中央、三十八神社の裏へせり出した尾根先端部に、字上ノ丸、字本丸の削平地があり、城跡の可能性がある。尾根道が字本丸へ下る鞍部には、小規模ながら堀切がある。藤井には、この尾

根と集落をへだてて向かいあう字ノヤシキの尾根上に、見事な空堀三本を伴う二郭の城跡がある。この城跡の主郭の方は、東山内に広く分布する单郭方形の在地土臺の城（仮に山内型の城と呼ぶ）と同形である。おそらくこれは藤井氏の居城であろう。この城が存在する以上、前述の神社裏の城郭遺構は、藤井村土着の勢力の築いたものとは考えられない。龍王山城と結ぶ道を防衛する位置と形態を示すので、龍王山城の附属施設と考えるべきである。さらに字ノヤシキの城が、本来の单郭のものから、二郭に拡張されていることは、こちらも龍王山城との関係から手が加えられたものと見ることができる。龍王山城の出城と評価するのがよいだろう。

このように見えてくると、藤井へ下る二本の道も龍王山城の城道であり、藤井集落の周囲まで附属施設の分布する広域の城域とみなさざるをえなくなる。実に広大な城域を誇る全国屈指の巨城として、今後一層慎重な調査と保存の手を加えるべき史跡というべきである。

#### 4. 保存・整備について

保存・整備計画の具体的な内容については、別途詳細に検討すべきことであるが、ここでは一般的に留意すべき点を簡単に付記しておく。

龍王山城は、他の中世城郭とも同様だが、石垣が少なく、全体に土造りなので、崩れやすく、無理すれば道でない場所も通れるので、間違った道を新造してしまう危険性がある。例えば、現在は北城本丸⑤から④へ直接下る道があるが、これは明らかに後世踏み崩して出来た道であり、城の道ではない。こういう後世の道を安易に史跡の遊歩道として整備してしまうと、繩張の意味がわからなくななり、遺跡の偽造にもなりかねない。城の繩張を生かして道を整備するのが、まず第一に留意すべきことである。

道の整備工事の仕方については、基本的には下枝・ブッシュを伐採するだけでもよい。崩れて通りにくい所だけ丸太をあてがって補修するにとどめたい。本来狭かった道をあえて規格の幅に拡幅したために、郭の壁面を崩すだけでなく、狭いことに意味のあった繩張上のポイントを不明瞭にしてしまった整備事業があるので、注意すべきである。

郭の面上の整備については、例えば北城の本丸は広くて史跡公園の中心だし、現在植林されていないことでもあるので、全面伐採して見晴らしをよくすることが許されるが、他の郭はなるべく伐木せず、下草を払うだけにとどめた方がよいのではなかろうか。土壠は、ほとんど崩れて低くなっているが、補修せずそのままでもよい。できるだけ現状を維持しつつ整備する工夫がいる。

主な郭には、現在地をマークした城図を入れた掲示板を立てる。石碑は北城本丸だけにした方がよいと思われる。石碑を立てる際に郭面を掘り込むので、事前に発掘調査の必要があるのはいうまでもない。道の所には道順を示す標柱を打つ。道以外の斜面に立ち入らないように繩張いを設ける。見学者に城跡の特徴を十分に観察してもらえるよう、便宜をはかるとともに、不用意な立ち入りによって、もろい遺構が踏み崩される危険をさけるために、以上のような注意が必要である。

狭い意味での城域については以上の如くであるが、それ以外の山地も、前述したように広義の城

城として丁寧に扱うべきである。ハイキングコースは、本来の城の道を尊重して整備する必要がある。しかし、道路敷が流水で掘れ込んで谷のようになり、通りにくい場所については、若干迂回して新道をつけざるをえないこともある。できるだけ元の道を補修して活用した方がよい。車道を整備せねばならない場合もあるだろうが、その場合は遊歩道以上に、城域の地形と景観の保全に配慮する必要がある。いずれにしても、ドライブウェーを新設して城跡を台なしにした例が全国に数多くあるので、道の整備に関しては、住民の理解を求めて慎重に計画する必要がある。

## 5. 参考史料

### ○ 永正4年11月13日 (『多聞院日記』)

十三日

今夜為國衆出頭一國土一揆悉以蜂起了、二上山・三輪山・釜口ノ上・桃尾カヽリ焼了、四人衆者則今夜奈良迄引離了 (中略)

一、一国一揆貝ヲ吹、時ノ声ヲ上震動了。

### ○ 天文11年3月17日 (内閣文庫蔵大乘院古文書「享禄天文之記」)

木沢殿信貴山ヨリ下テ、河州高麗被懸取ナリ、落合川合戦=打負、木沢殿打死也、十七日、十市  
衆山城ヨリサカリ、初夜時カラ勢遁、ニチヤウカタ焼ル、福堂カキラ籠ル、明十八日落ル、箸尾  
ヘ被取懸ル、法貴寺焼払。

### ○ 天文12年6月20日 (『多聞院日記』)

十九日、田舎之儀ニ付テ伊丹方へ下之處、萱生昔昔之間、逗留シテ釜口ニ留了、宇治丸三十三伊  
方へ遣了。

廿日、山城エトリ、日中ヨリ此方へ上洛了。

### ○ 天文12年11月3日～7日 (『多聞院日記』)

三日、見上洛来十三日治定之間、礼ニ下了、樽一か・両種、マンチウ<sub>ヨ</sub>源左衛門へ遣了、夕部釜  
口ニ留了、(中略)

七日、頼支懸了、七丸城へ下了。

### ○ 天文13年2月2日～21日 (『多聞院日記』)

二日、山ノ城へ源五郎・孫九御兒為見廻自當坊被下了、(中略)

四日、秦五郎召具シ虎寿殿見舞<sub>ム</sub>山ノ城へ下了、以次殿へ礼申させた、樽一か・両種<sub>マシカキ</sub>、  
御兒ヘマンチウ五十、伊源ヘ十疋遣之、日帰リニ沙汰了、日中後雨降了、(中略)

廿一日、退出了、加行者ヘ音信沙汰了、

一、藤太郎脛テ山ノ城へ遣了、返牒有之。

### ○ 永禄2年8月24日 (『享禄天文之記』)

十四日、松永彈正殿万歳<sub>ヘ</sub>陳立、二上カタケ本陳、高尾焼払。

十六日、十市方ヘ被取懸、刈生ロニテ十市人數六人打死ス、アツマサコノ大郎・井テタチ弥七打  
(重)

死、三好方池田内ナニカシ打死ス、

廿四日、生駒谷焼、十市山ノ城ハ堅固被持也。

○ 永禄3年3月19日 〔『享禄天文之記』〕

十九日夜、十市山ノ城ヲ箸尾ソウ次郎殿伊賀衆ヲカタライ、其内木猿ト云物大将シテ居取、十市殿ヲハ勘六同道シテ豊田ノ城マテ御落アル、上田打死、於上様ハ桃尾マテ御落、番座打死四人有、(ツバ)

○ 永禄8年10月11日 〔『多聞院日記』〕

十一日、竹下大將ニテ南へ出陣了、釜口本陣也云々、

一、龍王城之衆昨夜兩人ノキ了、内々ムホンノ衆沙汰アリ、被顯出了、様躰ハシレス、(中略)

(十八日) 一、十市殿為多聞山へ訴訟俄ニ上洛、是へ來臨了、

○ 永禄11年7月27日 〔『多聞院日記』〕

一、廿七日入夜十兵平城へ被入移了、近日秋山可動之由沙汰之間、此通狀、

○ 永禄11年9月27日 〔『多聞院日記』〕

十七日(前略)十市郷へ箸尾ヨリ、秋山龍王より出、散々ニ刈田放火果切了、

(廿九)

○ 天正4年1月 〔『尋憲記』年物註記〕

一、当國知人之事

筒井陽舜朝慶 年廿歳 当國ノ妻

多聞山方 当城龍城 右衛門介 当城在 当方後衆

中坊飛彈 古市

布施 万歳 鷹田 榎原 龍王十市山城

(ツバ) 堀本 細井戸 山田 秋山 柳生 狹川山中 貴川山中 伊賀 仁木

○ 天正3年7月18日 〔『多聞院日記』〕

十八日、明日於龍王城松永金吾トノムスメ御ナヘト祝言在之、貢物以下調下、言語道斯曲事非一也、名字ハ永代果迄也、アサマシ～～、(振り返しの「おどり字」～～は便宜上換にした)

晦日(中略)

一、松金ヘ為祝言ノ礼マコ介龍王ヘ下了、五十疋金吾ヘ、廿疋エヒナヘ、壱萬・両種 マツナク五十

二十疋御ちヘ、十後ヘユエンニト、一丁ツヽ御も・主請・上様ヘ

○ 天正6年1月14日 〔『多聞院日記』〕

一、龍王城今日ヨリ破之云々、為國尤珍重～～、

○ 「大和記」

一、十市ト申處ニ十市常陸之助ト申仁居候、此人先祖ヨリ代々此所ニ居候、城ハ山城ニテ候、大和ノ東山際者此人ノ領知ニ候、

〔以下は史料の信憑性について検討を要するが、何らかの事實を反映したものとして引用する。地名には混亂が認められる。〕

○ 明応6年3月 〔『島山家譜』〕

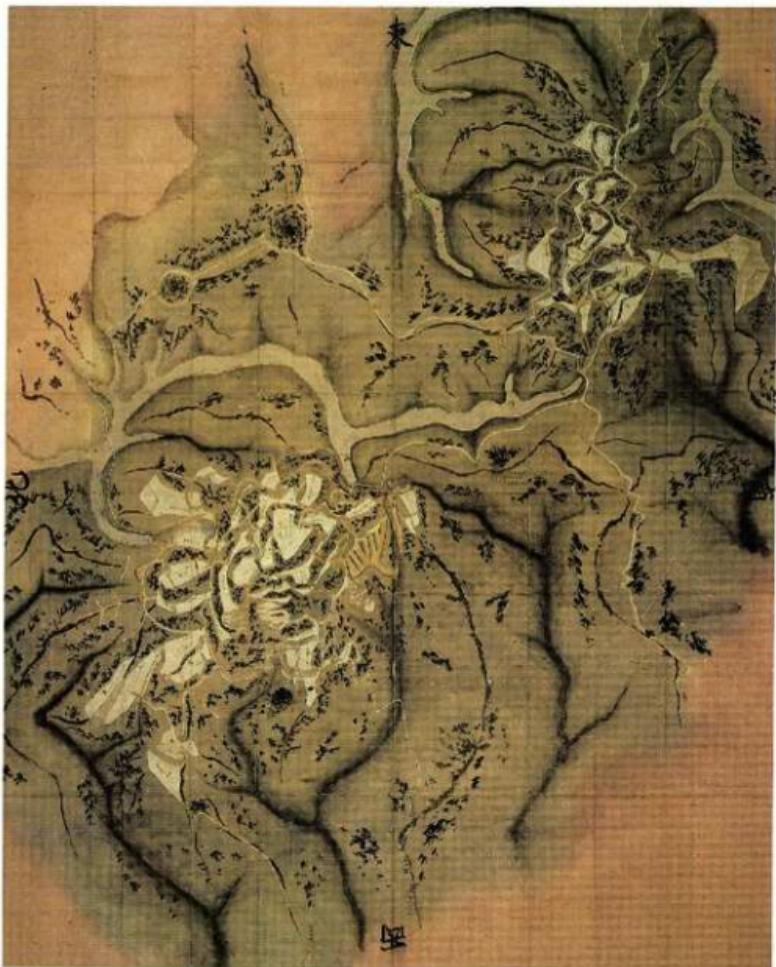
十市カ桃尾ノ城ニハ箸尾九郎遠為入替テ，会<sup>レ</sup>峰<sup>ミ</sup>出城ヲ築キ，通路ヲ持続ケ，要害堅ク取堅メケル。

○ 天文6年9月（「畠山家譜」）

貝吹ノ人々，十市兵部少輔遠忠ノ居城穴師山藤ノ城ニ<sup>(ツボイ)</sup>堀入<sup>(タマ)</sup>，遠市ノ家臣吉川河内守尚満ト共ニ植籠ル。

○ 元龟4年末（「畠山家譜」）

（十市兵部居城伝）十市兵部少輔遠盛ハ元来城上郡痛足山ノ頂キ，桃尾ノ滝ノ上，藤ノ城ニ在住シ，長臣吉川伯耆守ト共ニ守之，頃日又同郡押坂ノ陵ノ辺ニ出城ヲ築ク，



「南北山城絵図」(北浦家蔵)

各郭の配置や地形、道路、あるいは堀塁群など詳細に描かれてあり、「龍王山城」にとって貴重な資料である。



奈良盆地から龍王山城を望む。向かって右の最も高い峰が南城本丸跡、左の峰が北城本丸跡。  
(天理市九条町から写す。)



北城本丸跡から西方の展望。奈良盆地を眼下に生駒山系が一望できる。山麓に向かって右に益生、左に中山の集落が見える。



南城に残る枡形の跡。岩山を削って方形に掘げてある。視界をさえぎった二本の土塁のうち一本だけが、かろうじて跡をとどめている。



南城の郭をつなぐ当初からの石段。今も登山者に利用されている。



北城の南虎口。左右の土壘が食い違いに開口しているが、向かって左の土壘の先端は、ほとんど崩れている。



北城の大堀切にのぞむ土壘。石が露出、散乱しているところから、石材がこめられていたとみられる。



「五人衆ノ郭」の下から急斜面を一直線に下る豪快な堅堀。後世架けられた丸太橋が上方に見える。



北城南西隅の土橋。左は稜堀、右の斜面は馬池に連なり、攻め手は一人ずつこの土橋を渡らねばならない。



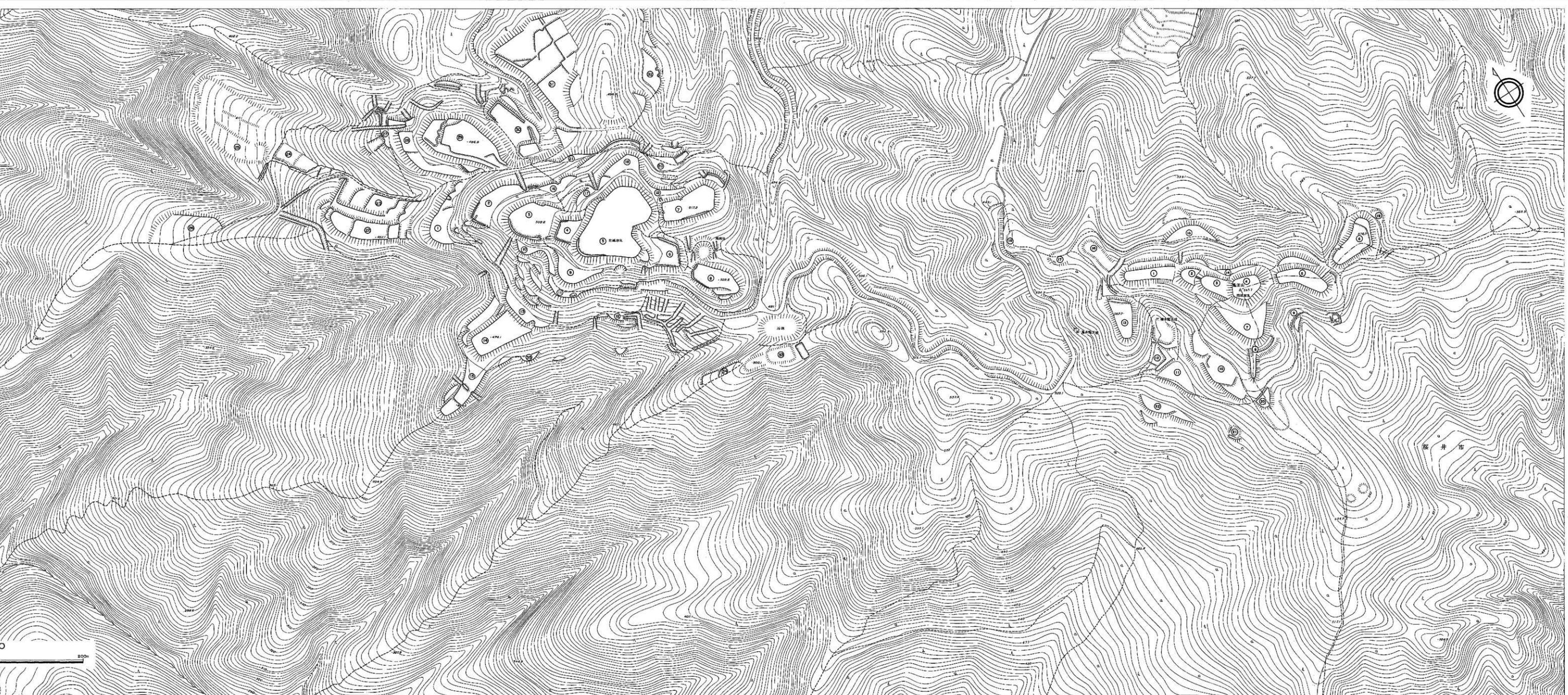
堅堀群。堀は埋まり浅くなっているが、地形が波うち、巨大な畠の畠のように見える。

龍王山城跡周辺図（縄張図）

縮尺二千分の一

1 : 2,000

0 50 100 200m



昭和56年3月31日 ©  
昭和57年3月31日 2刷

龍王山城跡調査概要

著者 村田修三

発行 天理市教育委員会  
天理市川原城町132番地

印刷 天理時報社  
天理市稻葉町80番地